



ドクター・ワッシー

診察室

ざくばらん

経過をメモに

早期の受診を

痛みの記憶

「痛かった」というのは、ひとの記憶に一番強く残りそうな経験に思える。それが、なぜか患者さんは、意外とあまいまいにしか覚えていない。

43歳のS子さん。「頭が痛くなって3日くらい続いたかな?」と、あやふやだ。いきなり痛くなったようだ。が、我慢できないほどでなく、風邪かと思っていたという。夏の盛りのような暑い日が続く。まさかか、医者の方を冷やしてやろうと考えたわけではない。

もしもその頭痛がそれまで経験したことのない初めてのもので、いきなり痛みが始まったというならタイヘンだ。まして、ガンと頭を殴られたみたいに痛くなった。冷や汗が

出たなどとなると、まずは「くも膜下出血」を疑わなければならない。脳動脈瘤破裂によるものなら、死亡率50%以上である。慌ててMRA(磁気共鳴血管画像)で脳の血管を調べてみると、脳底部にある動脈に5ミリくらいはある脳動脈瘤(コブ)が写っているのではないか。すぐにでも、手術のできる病院へ紹介しなければならぬ。

記憶は不確かだが、頭痛が起きたのは約2週間前のようだ。その時に、コブが破れ、軽いくも膜下出血を起したのだ。幸いに、小出血で済んだ。コブにできた穴は、すぐに塞がってかさぶたができたみたいになっている。だが、また破れたら、コブの穴はさらに大きくなり、その分出血量が多くなる。ワッシーの目の前で、S子さんの意識がなくなるかもしれないのだ。呼吸が止まるかもしれないのだ。

それまで経験したことのない頭痛が起きたのなら、放置しておいてはいけない。繰り返す。痛みの記憶は、あまいなものだ。まず、いつどこが、どう痛くなったか。どう経過したかメモしておくこと。もちろん、できるだけ早く受診することを忘れてはいけない。

(石黒修三 いしぐろクリニック)

・脳神経外科専門医、金沢市在住、射水市出身)



イラスト・野畑桃花